

# 青雲の果て

— 武人黒田清隆の戦い —

第6回

## 奥田 静夫

フリーライター・開拓史研究家

### 第4章 箱館戦争と榎本助命（続き）

#### 箱館戦争に参戦（続き）

5月9日、清隆は密かに五稜郭に近い有川の陣中に増田虎之助、曾我祐準（肥後）の両参謀を集めた。そして思い詰めた表情で口を開いた。

「敵が降伏したらどうするか意見を伺いたい。降伏したものを殺すのはよろしくない。その場合は、われらが救うことで尽力してはどうかと思うのだが…」

清隆の胸中には、長岡城攻防のときの反省や、庄内和平のときの苦い思いがあった。

（あとき西郷隆盛は、「決して長岡藩とは戦うな」と命じていた。参謀四人の中で、自分や吉井だけでなく、長州の前原さえも、政治工作論だったのに、山県だけが主戦論を唱え、妥協しなかった。岩村高俊や山県有朋が初期の動きを誤らなければ、あの河井継之助のような逸材を失い、多くの長岡藩兵や町民を犠牲にすることもなかった。開戦後も、薩長が指揮を分け合う建前があり、自分の思いどおりにはすすめられなかったが、庄内ではそれが出来た…。ここ箱館では不幸にして開戦は避けられなかったが、これ以上、あたら有為な人材を失い、兵や民に無益な犠牲を強いるべきではない。しかもいま、日本には欧米と比べ、榎本武揚らのような海外情報に精通した逸材が決定的に不足している…）

こうした思いの強い清隆の真剣な表情と、その毅然とした主張に引きずり込まれる形で、増田と曾我の2人はこれに賛意を表した。（「前掲履歴書

案」、曾我の日記）

このいわゆる「有川の密約」の存在は、そののち40年もたった明治42年（1909）の東京史談会で、曾我祐準が初めて発表している。（そのころは、清隆も増田もすでにこの世の人ではなかった。）

総攻撃の前夜、清隆は豊安、飛竜の2隻に兵8百人を乗せて、密かに箱館山の背後に回航した。

あくる11日の未明、箱館総攻撃が決定されると、山田顕義参謀は8千余人の主力に命じて行動を開始させ、海上の各艦も逐次砲門を開いた。

榎本軍の大鳥圭介は、五稜郭を出て七重方面を突破しようとしたが、失敗した。

清隆は山田参謀に正面軍を任せて、自分は手勢3百人を率いて箱館山の背後をよじ登った。地元民の藤井民部らがこれを手引きした。

山頂に達すると、清隆は部下の池田貞賢に命じて菊の御紋章の旗をひるがえし、鬨の声を四方にあげさせた。

山下の榎本軍は意外な奇襲攻撃に仰天し、土方歳三の新撰組、伝習隊をもってその進路を阻もうとした。

しかし奇襲部隊はこれを退け、一挙に山を駆け下りた。榎本軍迎撃隊はみな弁天砲台もしくは五稜郭に向けて後退した。

土方歳三も必死に督戦したが、ついに彼自身が一本木柵付近で戦死した。

こうして清隆の得意とする奇襲攻撃は榎本軍敗戦の決定打となり、戦局の帰趨は明らかとなった。

箱館の街は、いくらか兵火を免れ得なかったが、それでも両軍激突の戦場の場となる惨禍を避けることができた。

函館の斉藤与一郎という人が、清隆の奇襲が市民にどう映ったかを、次のように伝えている。

「私の家内のおばあさんは、とき25歳でありました。このときの光景をとときとき思い出して、『あときほど恐ろしいことはなかった。函館山のうしろから上陸した黒田（清隆）の部隊は、大刀をひらめかして、何ともいえない恐ろしいことであつた』と身震いをしながら聞かせておつたんです。」（斉藤「非魚放談」）

榎本軍は、五稜郭に追い詰められた。

#### 榎本助命に動く

総攻撃の翌日、清隆は、部下の池田貞賢を榎本軍の箱館病院長の高松凌雲のもとに派遣して、

「榎本以下の奮戦は感服の至りとはいえず、天朝に反抗した罪は許しがたい。しかしさればといって、世間が言い触らすごとき残酷な処置をとるものではない。無益なくさはやめさせてはどうか」と榎本に伝えることを依頼した。

高松は将軍家のお抱え医師で、徳川慶喜の弟昭武のお付き医師としてパリ万国博覧会へ派遣されるなど、数度の外遊によって赤十字の存在をわきまえていた。負傷者を敵味方の区別なく病院に収容し、榎本もそう指示していた。

そこで池田の言葉に、清隆がよく赤十字精神を理解していることを添えて、榎本に送付した。はじめ久留米兵が病院に乱入して乱暴を働こうとしたところを、清隆配下の部隊長が駆けつけてこれを止め、その保護下においたのだ。

清隆の胸中には、前述したように、榎本らはこれからの日本にとって、失ってはならない貴重な宝だとの、強い思いがあった。

しかし榎本は、自分の部下の中に平和を希望するものも多いことを知りつつも、あくまでも蝦夷地の一部を賜って志を達成したいと考え、投降を応諾しなかった。

彼は降伏勧告拒絶の返書を高松に託したが、その追伸として次のように記した。

「この書物二冊は、自分がオランダ留学中に苦心して研究した『万国海律全書』である。いまの日本にとって失ってはならない貴重なものと思ひ、ここに謹んで日本海軍にささげるものだ」

榎本は徹底抗戦を返答しつつも、所有する『海律全書』上下2巻が戦火で失われるのを惜しんで、清隆に贈ったのである。

清隆は、自分の死より学を惜しむ榎本の心情、男気に率直に感動した。そしていっそう意を尽くして平和を説いた。榎本を救うため、なおも五稜郭を降伏させる努力を続けた。

彼にとって、この説得は実弾戦以上に骨が折れる役目であった。

双方の兵はいったんは矛を納め、陣営のかがり火も穏やかに見えた。しかし清隆と榎本の“目に見えない戦争”は熾烈であった。

清隆は榎本軍にマグロ5尾と酒5樽を贈るとともに、わざと包囲の一部を解いて、脱走を促した。

榎本の親類で、のちに外務大臣をつとめた林董ただすの回想録には、当時の様子がこう記されている。

「それまでの官軍は残酷だった。…戦って死ぬ

覚悟をして、五稜郭に籠こもっていた。しかしマグロや酒樽の贈り物で軟化してしまった。箱館の負傷兵も官軍に厚遇されたというので、いよいよ戦いをしようという心がなくなってしまったのだらう。夜、堀を越えて逃げ出す者が続出した。」

榎本は酒樽のかがみを抜いて将兵にふるまいながら、心の中で密かに彼らと訣別けつべつし、自室に入って自決しようとした。

しかしこれに気づいた小姓の大塚かくのじょう霍之丞（彰義隊改役）に刀をもぎ取られ、果たさなかった。

このとき、大塚は自分の指3本を負傷しながらも、必死に止めている。

やがて榎本は降伏を決意した。

5月17日朝、彼は亀田八幡宮の付近に出向いた。

待ち受けていたのは、清隆と増田虎之助で、空店舗にゴザを敷き、真中にスルメと酒徳利が置かれていた。

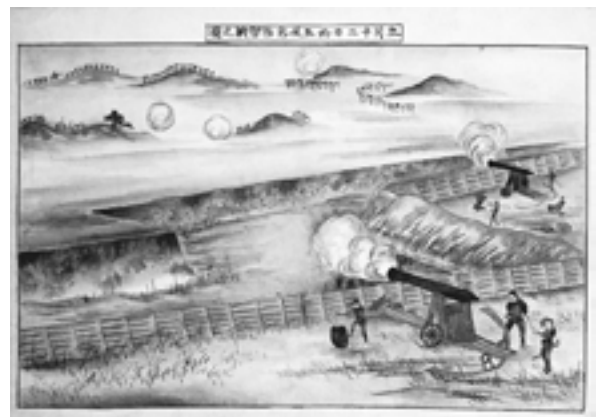
清隆が榎本に会うのは、これが初めてであった。しかし、たがいの話し合いは、穏やかな雰囲気なかで終わった。

翌18日、榎本は1千人の兵とともに五稜郭を出て、新政府軍に降伏した。

五稜郭接収の検分に臨んだ曾我参謀は、城内がくまなく掃き清められているのを見た。玄関にはロシアのクリミヤ半島にあるセバストポリ要塞の図が掲げられていた。

21日、榎本武揚、大鳥圭介、荒井郁之助、松平太郎、永井尚志、沢太郎右衛門、松岡磐吉ら旧榎本軍幹部七人は、箱館を発って青森に護送された。このとき清隆28歳、榎本は32歳であった。

一方、西郷隆盛は、清隆の箱館征討の様子を、北越のときと同様、半ば不安な気持ちで見守っていた。



麦叢録附図「五月十二日於五稜郭防禦戦之図」（函館市中央図書館蔵）

彼が薩摩兵を引き連れ、薩摩藩主の親書と慰勞金をもって箱館に来たのは、5月25日であった。しかしすでに清隆は、おおかたの終戦処理を終えていた。

西郷は上陸することなく、巨眼一瞥<sup>いちべつ</sup>、すぐに帰航していった。

榎本をはじめ、7人の旧榎本軍幹部は、東京・辰の口の獄に投獄された。箱館には清水谷公考府知事らが帰任し、港に在泊中の各国軍艦は、21発の礼砲を轟かせてこれを歓迎した。

5月末に東京に戻った清隆は、榎本らの助命運動を開始する。これ以降、清隆はまさに自分の全身全霊を傾けて、榎本助命の実現に邁進していくのである。

9月14日、清隆はそれまでの軍功により七百石の下賜の感状を受けた。

西郷、木戸、大久保らを別格とすれば、このときの軍功は、歴戦の勇士でも山県有朋・山田顕義各6百石、清水谷公考250石、増田虎之助2百石、太田惟信170石、曾我祐準150石に過ぎなかった。

### 清隆の結婚

明治2年(1869)11月、清隆は旧旗本中山勝重の長女清と結婚した。大久保利通の世話によるといわれる。

このとき清隆は29歳で、当時としては晩婚であった。新妻の清は、数えて16歳であった。

そのころ清隆は、外務権大丞から兵部大丞(陸軍少将相当)に進んでいた。

崇敬する西郷隆盛は、このころ中央を離れて鹿児島にいたので、清隆はごく自然な形で東京での大久保利通との接触を強めるようになり、同時にその政治的感化を受けるようになっていった。



大久保利通(国立国会図書館蔵)

このことを清隆自身は、周囲の者に、

「自分は西郷を父とし、大久保を兄とするものだ」

といていた。

大久保は清隆の結婚をわがことのように喜び、清隆の挙式のあくる日、

「…昨夜は御めでた

ふぞんじ候。いかがの御事に候や。定而ほさつ界に御得道出来被成候筈。穴かしこ」(11月23日付)と、日ごろ謹厳な彼には珍しく、やや茶化しぎみの便りを清隆に送っている。

清隆は、意外に子供好きであった。

大久保の家には男の子ばかり5人がおり、満寿子夫人は非常に面倒見のよい性格で、新婚の清隆夫婦に何かと世話を焼いた。

大久保宅を頻繁に訪ねた清隆は、無邪気な子供たちに背中に登られたり、髭を引っ張られたりしながらも、目を細めて喜んでいた。

清隆夫婦に始めての子供が授かったのは3年後のことで、生まれた子供には、「一」と名づけてかわいがった。

のちのことだが、明治6年(1874)春、開拓使のアメリカ人顧問ケプロンが北海道に出張することになり、東京・隅田川河畔で送別パーティが開かれた。身分のある夫人たちも多数出席した。

自身も夫人同伴で出席したケプロンは、このときのことを、

「清隆夫人などは、本当に綺麗な方であったが、外国人に見られるのを尻ごみされたのは、惜しいことであった」

と回顧している。

### 榎本助命に成功

箱館戦争の降将榎本武揚らの処分について、木戸孝允などは、

「他の者はともかく、榎本はどうしても死罪にしなければならぬ」

と執念を燃やし、大村益次郎兵部大輔(長州)に対しても、

「薩摩人が、しきりに彼らの助命を建言しているようだが、気にすべきではない」

といて迫っていた。こうした意見は、とくに長州出身者の間に強かった。

それは、長く続いた戊辰戦争などで多数の犠牲者を出した長州藩士の心の中から湧き出た、自然な気持ちであったろう。

清隆は大久保利通を動かし、寛大な処置(寛典論)を強く主張して、これに対抗した。

大久保は、アメリカの南北戦争のとき、南軍のロバート・E・リー将軍がいち早く釈放された例をあげて、

「榎本問題の処理の仕方によっては、わが国の後進性を露呈するものとの批判を受けるのではないか」

と木戸孝允を強く牽制した。

その矢先の明治2年(1869)9月4日、大村益次郎兵部大輔が、不平士族に襲撃されるという事件が起きた。大村は11月初めに死亡してしまった。

このころは、さすがに寛典論者も声を潜めざるを得ない雰囲気は漂い、榎本らの生命が一番危険に晒された時期といつてよかった。

現に、岩倉具視の大久保に宛てた手紙にも、榎本らの死罪を当然視する表現が見られた。

思い詰めた清隆は、髪を剃り、首から数珠をかけた姿で、

「万一榎本が死刑になれば、自分は僧になって世を捨てる」

といつて各方面に陳情して歩いた。

この当時の清隆の写真は、いまも残っている。

福沢諭吉も清隆の助命活動に協力し、いろいろ相談に乗った。

まもなく清隆は開拓次官(明治3年(1870)5月9日付)となり、翌年1月には渡米することになった。

(渡米前に何とか榎本らの処置にメドをつけなければ…)

12月5日、清隆は、岩倉具視に対して、

「榎本武揚の死刑は、ぜひとも免除していただきたい」

と要請し、29日には三条実美に対しても同様の陳情を行った。

「榎本を処刑したら、薩摩と長州は決裂するだろう」とも警告した。

さらに明治4年(1871)1月初めに横浜を出帆する直前、やむにやまれない気持ちに駆られて、次のように朝廷に上奏した。

「榎本釜次郎処置之事、彼固より薩長を憾み王師に抗し箱館に拠る。其罪大なり。然れども聖上寛仁の徳に感じ終に軍門に降伏す。既に其降を受け、是を東京ニ護送し、又是を殺せば、即ち条理を失い、千歳青史に愧るあり。故に死一等を宥め、朝典をして欠失なからしむるを適当とす」(「黒田清隆履歴書案」)

つまり、「天皇陛下の人徳に感じ入って降伏した者を殺すことは、政府が皇室を軽視していることを公表するようなものだ」というのだ。

6月に清隆が帰国しても、この件は未解決のままであった。

11月に、今度は岩倉具視一行が外遊することになったが、そのとき副使の大久保は、

「拳国一致体制を確立するためには、入牢中の榎本らの人材を起用すべきである」

と建議した。

さすがの木戸も、清隆や大久保の断固とした、しかも粘り強い行動に押され、次第に軟化していった。

この間、榎本たちは、牢獄で読書<sup>さんまい</sup>三日の日々を送っていたが、明治5年(1873)1月6日、榎本をはじめ松平次郎、荒井郁之助、永井尚志、大鳥圭介、沢太郎右衛門らは、ついに無罪放免となった。死一等を免じ、わずかに士籍を削って平民に降ろされただけであった。彼らの獄中生活は、実に2年半の長期に及んでおり、蟠竜艦長の松岡磐吉(幕臣)は、獄中で病死していた。

世間の人々は、清隆の異常なまでの粘り強さと義侠心を褒めたたえ、西郷隆盛も、この結果を大いに喜んだ。友人柱四郎あての手紙に、このことを、「清隆が、箱館の勝利のうえに、さらに偉大な勝利を積み重ねようとは思ひもしなかった」

と書き綴っているほどであった。なお、この手紙の中で、

「アメリカの艦隊の司令官が、政府にお願いしてやろうかと申し出たのを、清隆が押しとどめた」と書いて、清隆の人間的な成長を喜んでいる。

まもなく榎本らは、清隆の影響下にある開拓使に採用された。

榎本武揚は、清隆や福沢諭吉の尽力に心から感謝していた。これ以降、榎本は、黙々として国のため、そして清隆のために献身的に尽くしていく。

清隆は、その剛毅でやや一本気な性格などのため、幾度か政治生命を断たれかかった。しかしそのたびに、榎本がこれを包み込むように、さりげなくバックアップしている。

---

## profile

**奥田 静夫** おくだしずお

1943年福井県生まれ。金沢大学法文卒。北海道開発局官房長、(社)北海道建設業協会専務理事を経て、フリーライター・開拓史研究家。一道塾会員。札幌市在住。2006年3月、「魂を燃焼し尽くした男—松本十郎の生涯」で第26回北海道ノンフィクション大賞受賞(雑誌「クオリティ」同年4~12月号連載)。

---